



# グローバルな助け合いについて考える

すずき もと紀  
鈴木 紀

民博 先端人類科学研究部

おぼえたての猿踊りを精一杯舞うマヤの人びと。  
さまざまな集団とのかかわりが必要な社会において、その姿が意味するものは何だろうか。文化再生への自発的な挑戦ともみさせる彼らの背後をみつめ直すことにより、人類学のあらたなアプローチについて考える。

## 猿踊りとマヤ民族

二〇一〇年五月二三日、中央アメリカのベリーズ国南部トレド地方にあるラバントウン遺跡で、近隣のサンホセ村に住む有志のグループが猿踊りを舞った。彼らはモパン語を話すマヤ民族の人びとだ。下は小学生から上は村の長老まで二五人の踊り手の思いはひとつ。過去二〇年以上上演じられることがなかった猿踊りの復興だ。

モパンの人びとの大半は、もともと隣国グアテマラに住んでいた。しかし一九世紀半ばころから故国で土地を奪われ、難民となってベリーズに逃げてきた。現在はベリーズ国民となり、政府から与えられた居留地で農業を営んでいるが、生活を安定させるためには市場経済への参入が不可欠だ。その結果、彼らの暮らしは居留地内部で完結しなくなり、トレド地方のさまざまな民族（スペイン語を話すラテン系の人びと、カリブ海地域からやってきたガリフナの人びと、アメリカやヨーロッパからの移民、そしてはるばるアジアからやってきたインド系や中国系の人びとなど）とかわりながら、自己のアイデンティティを主張する必要がある。

習いたての猿踊りゆえ、ぎこちない面があったことは否めない。しかし精一杯踊る彼らの姿からは、マヤとして現代を生き延びようとする意志が読み取れた。こうした現象を、マヤ民族の自発的な文化の再生とみな



マヤ遺跡ラバントウンを舞台に演じられた「猿踊り」

すことも可能だが、じつはその背後にたくさんさんの支援活動があることも事実である。わたしが関心をもっているのは、どのような支援がこうした結果を生んだのかという問いであり、そうした支援が現代社会に対してもっている意味の考察だ。

## 支援の人類学

二〇〇九年一〇月から三年半の計画で「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」という研究が始まった。これは民博の機関研究「包摂と自律の人間学」領域のプロジェクトである。研究代表のわたしを含め先端人類科学研究部に所属する五人の教員、および機関研究員二名、館外の研究者九名、そして外国の研究者四名が参加している。

包摂とは社会的包摂ともいわれる概念であり、通常は、福祉国家のセイフティネット

から排除された人びとを再び国民社会に迎え入れようとする活動を意味する。自律とは、包摂された人びとが自分らしく生きるために自ら意思決定ができる状態をさす。こうした状況はどうしたら実現できるのだろうか。そのためには排除された人びとと包摂する人びと双方に、何が求められているのだろうか。「包摂と自律の人間学」の目的はこれらの問題の解明にある。

「支援の人類学」プロジェクトが採用するアプローチは、包摂と自律を促すための具体的な支援活動に焦点をあてることである。研究対象とする活動は多岐にわたる。それは包摂の対象となる人びとが多様だからである。例えば、移民や難民、およびその結果として無国籍となった人びと、開発途上国で社会的に周辺的な地位に置かれている人びと、そして先進国で少子高齢化に悩む人びとなどを想定し、こうした者たちへの支援活動の成果と課題を考えること、**「包摂と自律」の条件を浮き彫りにしたいと狙っている。**

## カカオのフェアトレード

マヤ民族の話しに「戻ろう。猿踊りが演じられたのはトレド・カカオ・フェスティバルという催しの一環であった。古代マヤ文明の時代からベリーズ南部がカカオの産地であったことにちなんだ地域興しのイベントだ。地



収穫されたばかりのフェアトレード・カカオ

元の観光協会や、環境保護団体、ベリーズ国文化歴史省などの共催だが、中心となっていたのはトレド・カカオ栽培者組合（通称TCGA）という組織だ。約七〇〇人のTCGA組合員から集めたカカオ豆は、マヤ・ゴールドというフェアトレード・チョコレートに加工されてイギリスやアメリカで売られている。有機栽培カカオの濃厚な風味と、カカオ生産者の発展に貢献するというフェアトレードのメッセージが功を奏し、とくにイギリスでは人気のチョコレートになっている。マヤ・ゴールドを購入する消費者の支援がなければ、TCGAの組織的発展はなく、それなしにはカカオフェスティバルも猿踊りも実現できなかったであろう。

支援活動としてのフェアトレードの面白さは、貿易という商業活動に生産者支援という慈善的活動を合体させている点である。市場交換と贈与をいっしょにした交換形態としていきたい。

## 民博機関研究

包摂と自律の人間学

「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」 2009年10月～2013年3月

代表者 鈴木 紀

\* 関連シンポジウム\*

機関研究国際シンポジウム  
「希望社会への道——スウェーデンと日本におけるウェルビーイングの思想と市民社会」

実施日 2010年11月7日(日)  
場所 国立民族学博物館講堂